

## 授業の明日にむけて

学校教育・伴野昌弘

### 1 授業の概要と工夫

本授業は、教育学部の2回生を対象とした（3・4回生でも受講可能）教科専門科目（選択必修）である。受講生の殆どの者は、3回生或いは4回生で教育実習を行うので、本年度も教育実習に即応し役立つ「教育思想史概論」を視野に、シラバスに示した授業目的（「欧米の人物中心にその教育思想の読解を通して、歴史から学ぶ態度を体得し、教育という営みの現実性かつ理想追求性に関わる深い教養を身に付ける。」）が達成されるよう15回の授業項目に則して講義した。以下三つの到達目標を記し、授業を概観しよう。到達目標（1）「教育学研究の広範な枠組みの中で、教育思想史を位置付け、意味付けることができる。」これは、授業のオリエンテーション（第1回）に対応した。即ち、教育学の一部門としての教育思想史とは何か、またそれを学ぶ意味を根本的に考察した。なかなか到達の困難な目標であり、本年の工夫として、歴史を学ぶ教育的意義を身近な問題から双方向的に考えようとした。到達目標（2）「広範多岐に亘る教育思想史を、代表的な人物と学説を中心に、その基礎的な文献読解を通して理解する。」これは、授業項目の第2回から第13回に対応し、本講義の中軸である。ただ、取り上げるべき人物が多岐に亘り、（厳選したが）結局は表層的な内容理解に終始し、十分な文献読解にまで至らなかった点が反省される。主なプリント配布は行ったが・・・到達目標（3）「現代社会の教育的諸問題の解決のために、各自それぞれのテーマを設定し、上記（2）の考察を基にその解決法の端緒的追究を試みる。」これは、授業項目の第14回とレポートの課題（その2）に対応した。単なる机上の学問とならぬためにもこの観点は重要であり、学生は各自、主体的に作業を進め、貴重な探究を試みた。因みに本年度の受講生（22人）の興味と関心によって取り上げられた人物とその人数

は以下の通りである。ペスタロッチー（5人）、フレーベル（5人）、デューイ（3人）モンテッソリ（2人）、ロバート・オウエン（2人）、プラトン、コメニウス、ヘルバルト、スペンサー、ケルシェンシュタイナー、（各1人）、また、社会・教育的関心事の主なものは、子どもの体力低下問題、携帯電話問題、いじめ問題等である。

### 2 学生達の反応

本年も授業全般に関わる感想、意見、印象的な点を自由に記してもらったが、まず授業内容に関し、数個の主な感想を挙げてみよう

①西洋教育思想史の核たるキリスト教の意味を、実際のクリスマス会を通して、初めて詳しく学べ、教養になった。しかもプレゼント交換は大変楽しく嬉しかった。（多数）

②歴史を、「存在としての歴史」と「叙述としての歴史」に区分することに興味を持った。

③印象的なことは多いが、特にプラトンの「洞窟の比喻」とクリスマス「賢者の贈り物」「サンタクロースのお話」には感動した。

④先生の姿勢から、教師における愛と情熱、そして「志操」の大切さを学んだ。この喜びを次世代に伝えたい。

### 3 総括と反省

授業内容に関しては、学生達の反応は、上記のように概ね肯定的であり、興味深く受講できたようだ。授業方法に関しても、板書の在り方など、特に問題はなかった。ただ担当者として、よりよき授業（授業の明日）に向けて、今後もより見易い計画的な板書を心掛けたい。またレポートも活用し、学生との討論の時間を増やし、更なる双方向の授業を目指したい。なお、その時間の捻出のためにも、シラバスの項目の重要度に強弱を加味して行う「めりはりのある授業」も今後の検討課題としたい。